

巻頭言

国際委員会の活動から

岸本年史 日本精神神経学会理事
Toshifumi Kishimoto

私は武田雅俊先生のあとを受け、2016年度から国際委員会の担当理事として同委員会委員長を務めている。国際委員会のめざしているところは、日本精神神経学会の国際化であり、国際化には外に向かう国際化と内なる国際化があると思うが、「国際化」を10年ぶりに改訂された広辞苑(新村出編, 岩波書店)で引いてみた。同書の初版は、1955年5月25日で私の誕生日と同じであり、ちかしく感じている。今回の第7版も購入した。そこには、「国際的な規模に広がること」とあり、さらに「国際」を引くと「諸国家・諸国民に関係すること。もと「万国」と訳され、通例、他の語の上に付けて用いる」とあり、第6版と変わっていないのと陳腐のように思え、少しがっかりした。国際委員会の近年の歩みと現状を報告し、近い将来を展望し、会員諸氏のご意見を伺い日本精神神経学会の国際活動に資したいと思う。

学会のホームページにもあるように、その活動内容は、日本精神神経学会の国際交流活動の推進を意図し、活発な活動を行っている。具体的には、国際学会への会員の派遣、日本の若手医師の国際学会への主体的な参加を奨励するための国際学会発表賞の選考、海外の若手医師の本学会の学術総会への招待と彼らと本学会員との共同シンポジウムの組織(Fellowship Award)、海外の精神医学関係学会への英文リーフレットの頒布、World Psychiatry 掲載論文の翻訳と会員諸氏への提供、世界精神医学会(WPA)の日本誘致に向けた活動などを行っている。

会員の国際学会への派遣は公募しており、王立オーストラリア・ニュージーランド精神医学会(RANZCP)、アジア精神医学会(AFPA)などに派遣している。本年は公募ではないが、アメリカ精神医学会との合同シンポジウムへも会員を派遣する。国際学会発表賞は個人部門とシンポジウム組織部門があり、2017年度には前者で13名の、後者で3名の応募があった。個人では5件が受賞し、シンポジウムは2件までが受賞できる。後者についてはこれまで応募者が少なかったことから、応募資格の40歳未満を45歳未満に、精神科医歴10年未満を15年未満に2017年度から改めたところである。学術総会では、2017年からLeaders

Round Tableとして、各国の代表的な方々と本学会の活性化について意見を交換している。本年は「Diversity」をテーマに男女共同参画を中心に話し合われる。2006年に始まったFellowship Awardは国際委員会企画のシンポジウムに、そのテーマについて各国の精神医学会からの推薦によるシンポジストを世界から募っている。初年度の参加者は1名だけであったが、近年は応募者が増え、2018年の神戸の学術総会には各大陸のWPA加盟37学会から67名の応募があった。資格・小論文審査によって新進気鋭の若手精神科医12名を選出し、学術総会に招待している。本年のシンポジウムのテーマは「Consultation Liaison Psychiatry」「Gender Dysphoria」である。

また、招いた受賞者たちとの協働・連携を促進する実践的な活動も芽生えている。2016年の第112回学術総会において国際共同研究を立案する予備的会議を行い、その報告がWorld Child & Adolescent Psychiatry (2016年6月)に掲載された。2017年の第113回学術総会では公式に戦略会議を行い、具体的な共同研究を作るためのブレインストーミングが行われ、Fellowship Award受賞者と日本の若手医師とで6つの研究案と国際チームが作られた。そのうち、自殺に関する共同研究と成人のADHDに関する共同研究が、参加者たちにより具体化し、実施に向けての最終段階に入っている。本年の学術総会でも継続するための戦略会議が計画されている。シンポジウムはもちろんのこと、これらの戦略会議も広く会員に開かれているので、興味のある方の参加を期待している。さらに広く会員に世界の情報を紹介すべくWorld Psychiatry 掲載論文を秋山剛副委員長や日本若手精神科医の会(JYPO)有志による翻訳によって提供し配信している。

喫緊の課題ではないが、海外に在住する日本の精神科医のために、さらに日本精神神経学会を愛する諸外国の精神科医を育てるために、国際会員の試案も考えているところである。整えば会員諸氏に報告し意見を求めたい。これらの活動は広く会員諸氏に有益なものであるべきであり、交流だけでなく、内なる国際化にも一層努めたい。